

令和5年度（2023年度） 第2回横須賀市政策推進・行政評価委員会会議 会議

- 日 時 令和5年（2023年）8月9日（水）14時00分～16時00分
- 場 所 横須賀市役所本館3号館302会議室
- 出席者 【委員】  
高見沢委員長、藤枝委員長職務代理者、  
岡本委員、笈委員、菊池委員、篠原委員、多田委員、中澤委員、  
馬場委員（50音順）  
（欠席：菊地委員、久保内委員、須藤委員）
- 【事務局】  
宮川経営企画部長、吉田都市戦略課長、佐野主査、小坪
- 傍聴者 なし
- 資 料 資料1 委員名簿  
資料2 横須賀市の人口の動向  
資料3 横須賀市のまちづくりの戦略  
資料4 地方創生関係交付金事業の事業進捗  
資料5 地方創生臨時交付金事業（コロナ交付金）の事業結果  
資料6 横須賀市の人口の動向（追加）
- 議事内容 市が考える「まちづくりの戦略」の推進について  
・ 議事2 民間連携や投資の呼び込み  
・ 議事3 市民生活の充実
- 報 告 (1) 地方創生関係交付金事業について  
(2) 地方創生臨時交付金事業（コロナ交付金）について

## 議題 市が考える「まちづくりの戦略」の推進について

### 前回の補足について ※関係資料：資料6

(高見沢委員長)

- ・ ニッセイ基礎研究所に天野馨南子さんという研究員がいらっしゃる。未来の出生数を考えるならば、圧倒的な未来人口の勝ち組は東京。そのパワーの源は「就職期に女性を集める力がダントツ」とおっしゃっている。
- ・ 地方には、若い女性が働く場所や働きたい仕事がなく、東京に出て行く傾向がある。
- ・ 横須賀は、地方都市の特徴を有しているのではないかと。

### 議事2 民官連携や投資の呼び込み ※関係資料：資料3

(筧委員)

- ・ 横須賀スタジアムに、ファームの試合をよく観に行く。最近、お子さんの観戦が増えているように感じている。
- ・ お子さんが見るようなところに広報をしているのか。そうだとしたら、もっと実施してほしい。

(事務局) 吉田課長

- ・ メインの広報媒体は、市のwebサイトと広報よこすかになる。最近、SNSも活用している。

(筧委員)

- ・ 横須賀と北九州を結ぶフェリーだが、認知度が低いのではないかと。
- ・ 大きく宣伝したほうが良いのではないかと。
- ・ 貨物は増えているのがグラフからわかるが、乗客数は増えているのか。

(事務局) 吉田課長

- ・ 客室も綺麗で、貨物だけでなく、人にもご利用いただいている。

(篠原委員)

- ・ みなとみらいに、WeWork というフレキシブルオフィスがあり、スタートアップや大企業など、さまざまな企業が利用している。オフィスには、共有スペースがあり、会社の壁をこえた異業種との交流や情報交換ができる場となっている。
- ・ 半島だと、大規模な製造業を誘致するのは難しいと思うが、WeWork のような場所が、横須賀にあってもよいのではないか。
- ・ 横須賀に来れば、横のつながりができるというイメージがつけば、スタートアップしたい企業などが集まるのではないか。
- ・ さらに、若年層の就労にもつながるのではないか。

(菊池委員)

- ・ 横須賀は、首都圏にある地方都市。
- ・ 情報やお金はテレポートできるが、人とモノは、テレポートできない。半島に位置する横須賀は、常に新しい人やお店が入ってくるような場所ではないため、どうしても新陳代謝が鈍い土地柄。
- ・ いい面は、結束力が固く、経済の振れ幅が小さいため、安定した経済が保たれやすいこと。
- ・ その反面、新しい商売がしにくいという面も持つ。
- ・ 起業するには、新しいマーケットが必要になり、横浜や東京といった大きいマーケットや刺激のあるところに行きがち。
- ・ テレワークスペースのような場所づくりから入るのではなく、経営メリットとなる環境を作り出せれば、コワーキングスペースなども有効に機能するのではないか。
- ・ 例えば「横須賀は、若い人の能力を育てる」といった宣言をして、育成を売りに、起業を考えている人を集めるのも、環境づくりの一つの方法ではないか。

(馬場委員)

- ・ WeWork は、コアなネットワークを築いて、専門的な知識を深め、自分を知ってもらおうネットワーキングをするのに有効な場所。例えば、「週末に、これについてディスカッションします」と告知がでると、利用者は誰でも参加でき、ネットワーキングができる。
- ・ WeWork は、どこにいても参加できることが強み。
- ・ 導入には工夫が必要。横須賀の WeWork に本社登記しながら、何かあったら集まるといった機会を作ることが考えられる。
- ・ もし横須賀に WeWork を作るとしたら、集まりやすいように交通の便が良いところがいいと思う。

(菊池委員)

- ・ 横須賀は、人と人との関係性が濃密。
- ・ 民間の誘致や連携は大切だが、市民活力を生かすのも一つの手。
- ・ 横須賀には、自分たちの手で横須賀を良くしようとするコミュニティがある。
- ・ そういう市民活力が向かっている方向のものに対して、それにマッチする民間企業を行政がつなぐということが大切ではないか。
- ・ 住んでいる人が、一定のステータスを持てるような場所でないと人口の流出は抑えられないのではないか。
- ・ まずは、住んでいる人に照準を合わせて、その活力を引き出して、市民活力と産業界と行政が三位一体となって施策を行っていくことで、横須賀に合った展開ができるのではないか。

(岡本委員)

- ・ 連携先はどうやって見つけたり、選んだりしているのか。

(事務局) 吉田課長

- ・ ご提案をいただくことが多い。
- ・ 民官連携の担当課を作り、主にそこでご提案を受けている。

(岡本委員)

- ・ 空き家の課題解決に関心のある友人が起業し、横須賀で空き家を買ってリノベーションするといったことをしている。
- ・ 横須賀の抱える課題に課題意識を持って、実際に動いている市民が多いイメージがある。
- ・ 課題について、関連する企業や市民を集めてディスカッションするような場や、アイデアコンペのような機会を市が設けてくれると面白い。さらに、学生が参加したいと思えるような場や機会にしてくれると嬉しい。

(菊池委員)

- ・ 行政が一から十まで全てできるわけではない。行政は、そういった仕組みを作ることが大切。
- ・ 市がきっかけを作れば、関心のある企業や市民が集まっていく。

(高見沢委員長)

- ・ そういったコーディネートに長けた人材を活用するのもよい。

(馬場委員)

- ・ スポーツの連携について、広島には、野球の広島カープとサッカーのサンフレッチェ広島がある。
- ・ 広島カープは、昔は弱くて、球場もガラガラだった。球場を綺麗して、強くなったら人が集まるようになった。
- ・ サンフレッチェも人気がなかったが、野球が人気になって、相乗効果でサッカーも人気になって、強くなった。今では、相互で選手同士が行き来したり、一緒にイベントをやったりしている。
- ・ こうなると飲食業など産業が集まってくる。
- ・ 横須賀は、ファームと練習場なので、広島とは状況が違うが、せっかくこういういったインフラがあるので、連携しない手はない。
- ・ 野球もサッカーも強いチームなので、もっともっと活用していったほうがよい。

(笥委員)

- ・ ベイスターズの一軍が強くなったことで、ファームの試合にも人が集まるというのは納得。
- ・ ちょっとした有名人が来るだけで、ファームに人が集まる。横須賀出身の元メジャーリーガー秋山選手や、バウアーが来たときは満員。

(篠原委員)

- ・ 以前、県のデジタル戦略関係で、IT企業のCIOと話したことがある。年収が億単位までであるようなIT企業のトップは、地方に拠点を設けると、人間関係が濃くないところを好み、地域色の薄い場所を選ぶ傾向があると述べていた。
- ・ 横須賀は地域色が濃いので、そういった人を呼び込むというよりは、ここにいけば何か教えてもらえるといった、人材育成とシェアオフィスに特化した枠組みを作ると、人が来やすいイメージになるのではないかと。

(事務局) 吉田課長

- ・ IT企業の社長が出資をし、横須賀にヤスウラボという場所を作った。
- ・ 地域企業や町内会などからの、ITに関する相談を受けたり、業務を請け負ったり、ITをキーにして、地域のハブになることを目指している。
- ・ また、西逸見の谷戸地域にある利用していない市の施設をリノベーションして、クリエイターやアーティスト、アスリートなどを対象に移住を進めている。今は、プロeスポーツチームが入居している。
- ・ 人材育成という面では、こういった動きも生まれている。

(藤枝委員)

- ・ 横須賀のまちづくりの戦略に立ち返ると、民間連携に至るには、民間の方に認知してもらい、魅力を感じてもらうことで、加速していくのではないか。
- ・ 「OPEN GATE YOKOSUKA」のサイトにも、横須賀の魅力や良い部分を含め、横須賀を紹介したうえで、課題のページに誘導する流れがあってもいいのではないか。
- ・ 横須賀市が、アプローチしたい相手に、伝えたい内容を伝えていくといったプッシュ型で情報発信していくと、課題解決につながる流れができるのではないか。
- ・ 横須賀市が考える民間とは、どういったもので、そこに対して何をアプローチしていくのが大事。

(事務局) 宮川部長

- ・ サイトをつくっても、見てもらわなくては始まらない。
- ・ サイトを立ち上げたときは、名刺交換した企業様に DM でご紹介させていただいた。
- ・ 民間企業の方と話しをするなかで、横須賀市の課題についてよく聞かれる。そういった経緯もあり、今回サイトのなかに課題のページを設けた。

(高見沢委員長)

- ・ ニッセイ基礎研究所によると、地方から東京に女性が流れてしまう最大の理由は、地方に女性の雇用がないこと。
- ・ 戻りたくても、働く場所がなくて帰れないと分析している。
- ・ こういったことも参考になるのではないか。

### 議事3 市民生活の充実 ※関係資料：資料3

(篠原委員)

- ・ 市民アンケート結果で力をいれてほしい取り組みに、比較的若い世代でも医療の分野が入っている。
- ・ 横須賀は、地域医療と大きい病院の連携が、県内で一番うまくいっている地域。横須賀共済病院が音頭を取ってやってくれている。
- ・ 今後も高齢者は入院ではなく、地域で見守りをしていくといった流れや、医師の働き方改革で医師の時間外を抑えるといった流れのなかで、医療体制の連携は非常に大切になる。
- ・ 救急医療に関しても横須賀三浦地域は、連携がうまくいっている。医療体制が強いということも横須賀の魅力になる。
- ・ さらに、横須賀では、フッ化物洗口（虫歯予防）を小学校で導入している。医療や保健の先進地域ということを推していてもいいのではないか。

(筧委員)

- ・ 安心して横須賀に住み続けるというところに注目すると、高齢者支援や障がい者支援がポイントになるのではないか。
- ・ その分野に携わる人たちへの手当など、処遇を改善することも必要。
- ・ 子育て支援に関しては、保育や学童支援を抜本的に変えないと、他都市と差別化できず、横須賀に移住しようとはまでは思わない。

(菊池委員)

- ・ 子育て支援が重要。市民アンケートでも、20代30代が力をいれてほしいと感じている取り組みの1位は、「子育て支援」。
- ・ 横須賀の子育て支援についての発信力が足りないのか、本当に足りていないのか、それが分からない。
- ・ 他都市と同じことをしていても、横須賀に移住しようとは思わないと思う。
- ・ 他とは違った、尖った施策の展開が必要。
- ・ 若い女性に戻ってきてもらう、もしくは定着してもらおうといったことも、今後、照準を合わせて行っていかなければならない。
- ・ 女性の働く場所や、ITスキルなど身に着けた技術が生かせる魅力的な環境とセットで考える必要がある。
- ・ 驚いたことは、10代が学校教育に力を入れてほしいとっていること。
- ・ 子どもの教育に力をいれなくてはならないと感じている。商工会議所では、市内中学校23校に赴いて、働くことについてのワークショップをするキャリア教育を15年間やっている。

- ・ 学校教育と社会のつながりを強固にすることで、地域への愛着や社会との関わる意識、姿勢が育まれるのではないか。横須賀市も積極的に関わってもらいたい。

(中澤委員)

- ・ 10代が学校教育に力を入れてほしいといっているのは、課題があるから何とかしてほしいというより、より良くしてほしいといった思いからではないか。
- ・ 観光振興についての世代間ギャップが気になった。20代では、力を入れてほしいと感じているが、30～50代では十分に行われていると感じている。
- ・ 20代に届いていないのか。横須賀市ならではの、オンリーワンかつナンバーワンで差別化をはかって、分かりやすい打ち出しが必要なのではないか。

(岡本委員)

- ・ 10代が学校教育に力を入れてほしいのは、自分が一番関わるからなのではないか。
- ・ 年代に応じて、自分にとってメリットがある取り組みに力を入れてほしいと感じるのは当然。世代によって、期待していることが違う。
- ・ 驚いたのは、「市政への市民参加や住民自治の推進」に、全然力を入れてほしいと感じていないこと。
- ・ 多くの市民が、自分が関わることがないと思っているのか、自分の声が届かないとあきらめているのか、理由は分からない。
- ・ いろんな世代の声を聞くといったことは、政策を考える上で必要。市民アンケートは続けてほしい。また、若い人たちが、こういった場に参加できるといい。

(多田委員)

- ・ 市は、限られた資源のなかで、市民の声を聞きながら、いろいろな事業をよくやっている。
- ・ 市のwebサイトや広報誌などでの発信の仕方やPRの仕方が、もったいないと感じる。
- ・ Youtubeを活用するなど、思いきったことをやってみてもよい。
- ・ 横須賀市でオンリーワンかつナンバーワンな取り組みは、発信の仕方も、尖らせるのがよい。
- ・ 市民生活が充実するというのは、ある意味、誰もが平等であると考える。
- ・ 横須賀市の取り組みは、充実していると思うが、PRの部分でもったいない。
- ・ 出し方ひとつで、異なった結果が生まれる可能性がある。

(馬場委員)

- ・ 知ってる限り、横須賀が激甚災害に見舞われたことはない。
- ・ 意外と横須賀は災害が少ない、というアピールが必要。
- ・ 双葉電子工業さんが、ドローンを作っている。比較的大きいドローンで、特殊なスピーカーが付いていて、上空 100mから、きれいに音声を届けられる。
- ・ 栃木県小山市の消防で初めて採用。
- ・ 災害の誘導もできれば、選挙の呼びかけなど、様々な場面で利用可能。
- ・ 横須賀市で利用を考えたとき、基地との調整が必要か。
- ・ 横須賀が、e スポーツでも、なんでも、本当に力を入れて取り組むなら、振り切ってやってもらいたい、世界レベルで。今は、中途半端な感じが否めない。

(藤枝委員)

- ・ 他都市の子育て支援に特化した事例で、千葉県の流山市がある。
- ・ TX が開通するまでは、非常に地味な街。
- ・ TX の開通とともに、街づくりが追い付いてきて、今では、首都圏でも人口増加率ナンバーワン。
- ・ それをそのまま真似するのが良いとは思っていない。ただ、市がブランディングプランを作っていて、認知から定住までもっていくといった、明確なストーリーが描かれているのは、参考になる。
- ・ シティーセールスが明確で、「都心から一番近い森のまち」「母になるなら、流山。」「市民の知恵と力が活きるまち」の3つを掲げている。
- ・ 今の流山は、広く認知してもらって、基盤をつくる段階であると認識しながら、施策を行っている。
- ・ 福祉や観光といった分野別ではなく、この3本柱に沿って、取り組みが行われている。
- ・ 流山市は、シティーセールスがクリア。
- ・ 認知から定住までの長期的なプランをイメージしながら、現状を認識し、分かりやすく市の特徴を出していくことが必要なのではないかと。

## 報告（１）地方創生関係交付金事業について ※関係資料：資料４

（菊池委員）

- ・ よこすか野菜をPRするのは大事。
- ・ ただ即売会で売るだけでは、それで終わってしまう。
- ・ よこすか野菜を継続的に利用してもらい、買ってもらうためには、飲食店を絡めて、よこすか野菜を使った料理を提供するなど工夫が必要。
- ・ よこすか野菜をブランド化や、地域への浸透を推進するために、レストランとの連携など、最初の立て付けをしっかり構築する必要がある。

（篠原委員）

- ・ 県の合同庁舎に、横須賀三浦県政総合センターがある。テレワークの場所の提供として、連携ができるのではないかと感じている。

## 報告（２）地方創生臨時交付金事業（コロナ交付金）について

※関係資料：資料５

（筧委員）

- ・ V字回復に向けた観光振興というのがある。
- ・ コロナ交付金を利用されているかわからないが、先日親子環境体験ツアーに参加した。リサイクルプラザ「アイクル」やエコミルの施設見学。
- ・ 定員 18 名に対して、参加者が 6 名しかいなかった。
- ・ 大変勉強にはなったが、事業のやり方がマッチしているのか疑問。

（菊池委員）

- ・ ワクチンの接種に関しては、横須賀は初動が早く、混乱が小さかったと感じている。
- ・ 市民も安心してコロナ禍を過ごせたのではないか。
- ・ 市のコロナ対応は、良かったのではないか。

（篠原委員）

- ・ 感染拡大の抑制など直接的な支援については、効果検証が大変難しい。
- ・ どんなに感染対策を行っていても、感染の波が大きくて上回ってしまう状況だった。
- ・ 地域経済の支援についても、何を評価指標にするか、指標をつくるのが難しい。

（菊池委員）

- ・ 地域経済の支援で、プレミアム付商品券の事業があったが、地域経済を直接的に刺激するので、非常に良かった。
- ・ 商工会議所でも地元のお店応援事業を行った。横須賀市と商工会議所が連携して、時期が重なることなく、さらに切れ目なく、事業展開できたことは良かった。

## 全体を通じて

(高見沢委員長)

- ・ 今年度の委員会では、第1回目で、人口に焦点を絞って、定住人口・交流人口・関係人口について徹底的に議論。
- ・ 横須賀市の特徴が、より深堀できたのではないか。
- ・ この議論も参考にしながら、さらに、これをこうしたら、こうなるのではないかとといったことを研究していただきたい。
- ・ 藤沢市は、人口のピークが前回推計より5年先に延びている。
- ・ 横須賀は、出生数が少ないというのもあるが、死亡数が非常に多く、自然減が圧倒的に進んでいる。他を追随させないほど。
- ・ 高齢者福祉に力を入れてほしいとアンケート結果ではあるが、もちろんそれはそれです。しかし、そればかりをしていると、高齢者がたまってくる。例えば、熱海とか伊東とかの温泉地。横須賀市は、そういったところを目指しているわけではないと思っている。
- ・ ニッセイ基礎研究所の天野氏によると、日本社会は男性優位で、地方の政策も女子に向けた施策は行われていない。イメージが悪いというより、地方には女子の居場所がない。一旦出て戻りたくても、帰る場所もないとある。
- ・ 高齢者福祉をただするのではなく、若い人たちの雇用の場をそこで創出して、介護だけでなく、多方面で活躍の場を担っていただくような仕組みを作るといった発想が必要。どのような施策を実施するにも、ブランドの中心的なテーマを意識しながら、事業を行うといったことが大切なのではないか。
- ・ 狙い撃ちするところは、どういった事業を行うにしても、意識しながら、重点的に行うことが重要。
- ・ その道のプロフェッショナルを外から連れてくるといった方法をとっている自治体が増えている。その道に長けている人にマネジメントしてもらえると、いいものができる。
- ・ 一つの事業をただ単独で行って終わりというのではなく、事業を構造化する仕組みをつくるとなると、そういった方法も一つの手。
- ・ 横須賀と聞いて思い浮かべるのは、小泉さんと米軍基地。尖っていて、国の中でも最先端なイメージ。そして、横須賀もチャレンジングなイメージ。
- ・ 消滅可能性都市が発表されてから、豊島区が対策を進めている。消滅可能性都市指標をモニタリングしてみることも必要なのではないか。
- ・ 現状を正しく理解すること、危機感をきちんと認識しながら、施策を打つことが非常に大切。

以上